文献と埴輪・壁画資料から見た牛甘（飼）ー牽牛織女説話の伝来年代を含めてー

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-12-19
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: KIMINE, Osamu
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00049494

人間社会環境研究　第34号　2017. 9

文献と埴輪・壁画資料から見た牛甘(飼)
― 牽牛織女説話の伝来年代を含めて ―

人間社会環境研究科　人間社会環境学専攻
基　峰　　修

要旨

牛甘は，「牛飼」とも書かれ，古代において牛の飼養・飼育及び管理を行っていた者及びその集団の名称であると考えられる。

本論では，牛甘（飼）に関連する文献史料を紹介した上で，(1)牛形埴輪，(2)装飾古墳の牛と想定できる図文，(3)高句麗壁画古墳で描かれた牛図，を比較分析の対象として，その共通点と相違点を抽出することで，牛の渡来と牛甘（飼）の特性について考察を行った。

牛及びその飼育や管理の技術は，5世紀後半以前に，馬及びその飼育や管理の技術と一連のものとして，朝鮮半島から渡来した可能性が高い。しかしながら，古代日本では，馬の生産に比べて，牛は極めて少なかったことが指摘でき，むしろ，その利用が皇族・貴族のための薬としての牛乳・乳製品の生産に限定されていたため，数多くの牛の生産の必要がなかったといえる。渡来当初，牛は馬甘（飼）によって馬と一緒に飼育されていた可能性が高く，馬甘（飼）と牛甘（飼）は明確に分化された存在ではなかったと考えられる。このことが，古代日本において，牛甘（飼）が専門集団として発達しなかった理由と考えられ，むしろ，牛甘（飼）の特性であったといえる。

また，牽牛織女説話も，牛の渡来と大差ない時期に，牛の飼育と一連の文化複合として，朝鮮半島から日本に伝来し，今日の七夕説話として定着した可能性が高いといえる。

キーワード

牛甘（飼），牛形埴輪，牛の渡来，牽牛織女説話

A Study on *Ushikai* based on Bibliographic Material and *Haniwa* / Tomb Murals
Including a discussion on the introduction of the legend of the cowherd and the weaver girl to Japan

KIMINE Osamu

Abstract

Ushikai (written牛甘 or 牛飼) is an ancient name for either individual cowherds or a group.

I introduced a series of bibliographic materials related to *Ushikai* in this paper, comprising: (1) A bovine-shaped *Haniwa*; (2) A drawing from ornamented tombs that is thought to be of a bovine, and (3) Bovine drawing on Goguryeo tomb murals. I identify the common features and differences amongst these materials, and discuss the arrival of cattle in Japan and the characteristics of *Ushikai* based on these

findings.

Cattle as well as raising and management technologies first arrived in Japan before the late 5th century from the Korean Peninsula, almost certainly at the same time and in the same context as horses. Evidence suggests, however, that only very limited cattle production was practiced in ancient Japan compared to horse production; it appears to have been little need for large numbers of cattle as their use at this time was limited to milk and dairy product production for use as medicines for the royal family and aristocrats. It is also highly likely that cattle were initially reared by *Umakai* alongside horses when first introduced to Japan, and that *Umakai* and their counterparts were not clearly distinct from one another. This is considered as one reason why the *Ushikai* of ancient Japan did not develop into a group devoted to entirely to cattle husbandry; rather, the absence of this developmental characteristic appears to define the group.

Finally, it is also highly likely that the legend of the cowherd and the weaver girl was transmitted to Japan from the Korean Peninsula as a cultural complex related to the cattle rearing around the same time as the importation of these animals. This legend has become part of popular culture as a modern-day *Tanabata* (Star Festival) narrative.

Key words

Ushikai, bovine-shaped *Haniwa*, Arrival of cattle, legend of the cowherd and the weaver girl

1 はじめに

牛甘は，「牛飼」とも書かれる。『日本書紀』巻第29・天武天皇紀下には，「都努臣牛甘」と「都努臣牛飼」が登場し，これは同一人物である。「牛甘」と「牛飼」は通用し，古代において同じ意味で使用されていたことが理解できる。また，『古事記』下巻・安康天皇では，「馬甘牛甘」とひとつの言葉のように併記されている。馬甘（飼）と同じように牛甘（飼）は，その名称及び字のとおり，古代において牛の飼養・飼育及び管理を行っていた者及びその集団の名称であると考えられる。さらに，10世紀初頭に編纂された『延喜式』巻28・兵部省式には，兵部省が管理する馬牧・牛牧・馬牛牧の国名及び牧名が記述されている条文がある（以下，『延喜式』諸国馬牛牧と記す）。平安時代には，律令国家が管理する軍馬生産のための牧が全国各地に置かれ，軍馬の飼養・飼育及び管理が行われていたが，その一部は牛牧・馬牛牧と呼ばれ，牛の飼養・飼育及び管理を行っていたことを窺い知ることができる[1]。

4～6世紀（古墳時代），律令国家成立以前の牛は，軍馬としての需要・供給の対象となった馬（動物遺存体としてのウマ骨及び馬装としての馬具や馬形埴輪，牧などを含めて）に比べると，研究の対象として取り扱われることが，ほとんどなかったといっても過言ではない。牛形埴輪についても，出土数が極めて少ないことが影響して，動物埴輪全体の研究の中で，その一種として紹介される程度の取り扱いであった[2]。また，動物遺存体であるウシの骨については，6世紀以降になると西日本を中心に出土するようになるが，それ以前のものについては，近畿地方の南郷大東遺跡（5世紀・奈良県御所市）[3]からの出土がよく知られている程度で，ウマの骨と比べると極めて出土例が少ない[4]。

以上の研究状況をふまえた上で，本論では，文献及び埴輪・壁画資料を中心にして，牛の渡来の問題と牛甘（飼）の特性を抽出することを目的に，その考察を進めたい。なお，動物遺存体としてのウシ骨の出土例の検討については，本論では割愛し，別稿での検討課題としたい。

方法としては，先ず，牛甘（飼）に関連した文献史料を紹介した上で，埴輪と壁画資料による比較検討を行う。埴輪と壁画資料の検討にあたっては，(1)牛形埴輪，(2)装飾古墳の牛と想定できる図

文，(3)高句麗壁画古墳で描かれた牛図，を分析の対象として，その共通点と相違点の抽出を図る。その結果にもとづき，文献史料による解釈と併せて，牛の渡来と牛甘（飼）の特性について考察したい。また，併せて牛の渡来の問題とも関わりの深い牽牛織女説話の伝来年代についても若干の考察を加えたいと思う。

2　文献史料の紹介

先ず，牛甘（飼）についての『日本書紀』と『古事記』の記事を抜粋して紹介し，考古資料を中心とした検討の一助としたい[5]。

［史料１］『日本書紀』巻第29・天武天皇13（684）年４月条

辛未，小錦下高向臣麻呂為大使，小山下都努臣牛甘為小使，遣新羅。

（辛未，小錦下高向臣麻呂を大使とし，小山下都努臣牛甘を小使として，新羅に遣す。）

史料１は，天武天皇13（684）年に，高向臣麻呂とともに都努臣牛甘が，朝鮮半島統一後の新羅に，国使として遣わされた記述である。ここでいう「牛甘」は，人名を表している。

［史料２］『日本書紀』巻第29・天武天皇14（685）年５月条

辛未，高向朝臣麻呂・都努朝臣牛飼等至自新羅。乃学問僧観常・霊観従至之。新羅王献物，馬二匹・犬三頭・鸚鵡二隻・鵲二隻及種種寶物。

（辛未，高向朝臣麻呂・都努朝臣牛飼等，新羅より至る。乃ち学問僧観常・霊観，従ひて至れり。新羅王の献物，馬二匹・犬三頭・鸚鵡二隻・鵲二隻，及種種の寶物あり。）

史料２は，史料１の続きに当たる遣新羅使の高向臣麻呂らの帰国記事である。史料１の都努臣牛甘と，史料２の都努朝臣牛飼は同一人物だから，「牛甘」と「牛飼」が通用していたことが確認できる。「都努臣」は「角臣」とも書き，角臣は，牛甘の新羅派遣中の天武天皇13（684）年10月の「八色の姓」制定で「朝臣」になったため，史料２は「都努朝臣」となっている。

なお，都努臣牛甘（飼）らの遣新羅使としての派遣から帰国までの期間は，13カ月という長期間にわたっている[6]。この間の朝鮮半島での出来事として，『三国史記』新羅本紀・神文王４（684）年11月条に，金馬渚の報徳国（小高句麗国）の滅亡が記録されており，それに絡んで，都努臣牛甘（飼）らが新羅に勾留されていた可能性が指摘されている[7]。

次に，牛甘（飼）の考察にあたり，特に重要となる『古事記』の記事を紹介したい。

［史料３］『古事記』下巻・安康天皇

於是，市辺王之王子等，意祁王・袁祁王二柱聞此乱而逃去。故到山代苅羽井，食御粮之時，面黥老人来，奪其粮。爾其二王言「不惜粮。然汝者誰人。」答曰「我者山代之猪甘也。」故逃渡玖須婆之河，至針間国，入其国人・名志自牟之家，隠身，役於馬甘牛甘也。

（ここに，市辺の王の王子等，意祁王・袁祁の王（二柱），この乱れを聞きて逃げ去りましき。かれ，山代の苅羽井に到りまして，御粮食す時に，面黥ける老人来て，その粮を奪ひき。しかして，その二はしらの王の言らししく，「粮は惜しまず。しかれども，なは誰人ぞ」答へ曰ひしく，「あは，山代の猪甘ぞ」かれ，玖須婆の河を逃げ渡りて，針間の国に至りまし，その国人，名は志自牟が家に入りまして，身を隠したまひて，馬甘牛甘に役はえましき。）

史料３は，雄略天皇（大長谷王）によって父（忍歯王）が殺され，その追っ手の追求を逃れた，後の仁賢天皇（意祁王）・顕宗天皇（袁祁王）が，逃げる途中で「山城の猪甘」と遭遇して食べ物（乾飯）を奪われながらも，播磨国の志自牟の元まで逃げのびて，馬甘（飼）・牛甘（飼）として身を隠した記述である。

この史料では「馬甘牛甘」と併記されており，志自牟は牛馬の両方を飼っていて，二王はその両方の世話をする仕事をしたと考えられる。ということは，馬甘（飼）と牛甘（飼）は専業ではなく，未分化であったということにほかならない[8]。ま

た，馬甘（飼）は「賤」の身分であったことがわかっているので，牛甘（飼）も同様であったと考えてよかろう。平安時代に馬牛の両方を飼育管理する馬牛牧があったが，馬甘（飼）・牛甘（飼）が当初未分化であったことの名残であろう。

3　埴輪・壁画資料の検討

次に，本論での分析の中心として，埴輪・壁画資料による牛甘（飼）の検討を進めたい。

(1)　牛形埴輪

牛形埴輪は，全国で14例程度の存在が知られており，近畿地方及び関東地方から出土している（**表1・図1・2**）。近畿地方の四条7号墳（規模不明の円墳又は前方後円墳・奈良県橿原市）及び船宮古墳（全長91mの前方後円墳・兵庫県朝来市）出土の牛形埴輪は，5世紀後半のものとして認識できるが，ほかは6世紀代のものである。出土地別に見ると，近畿地方に8割以上が集中する（**グラフ1**）。牛形埴輪は，近畿地方以外では，唯一，関東地方の千葉県からの出土が確認され，その千葉県でも，牛形埴輪の出土が確認できる地域は，旧国名では下総国に該当する。『延喜式』諸国馬牛牧には11の牛牧と3の馬牛牧が記載されているが（**表2**），下総国にはその一つである「浮嶋牛

表1　牛形埴輪出土古墳一覧

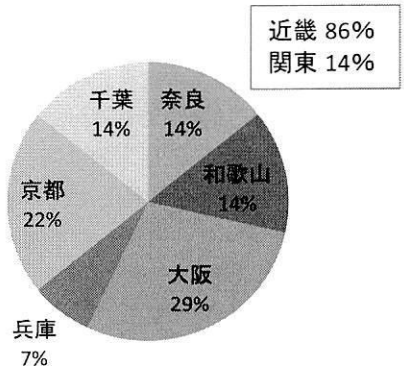
番号	出土地	古墳・遺跡名	墳形／規模	時期	牛形埴輪（残存部等）の特徴	共伴する形象埴輪	特記	関連文献
1	奈良県橿原市	四条7号墳	円墳又は前方後円墳／－m	5c後	頭部上半～頸部（角・耳・背骨の表現）	動物（馬・鹿・猪）・人物（力士等）・器財（家等）		註9
2	兵庫県朝来市	船宮古墳	前方後円墳／全長91m	5c後	鼻（鼻環付）と口の破片	形象（不明）		註10a・b，註17
3	和歌山県和歌山市	大日山35号墳	前方後円墳／全長105m	6c前	頭部～体部（脚部欠損）	動物（犬・猪・鷹・水鳥）・人物（力士等）・器財（家等）		註11b
4		鳴神埴輪窯跡	埴輪窯	6c前	角のみ			註11b
5	大阪府高槻市	今城塚古墳	前方後円墳／全長350m	6c前	頭部（角・耳の表現）～体部・脚部	埴輪祭祀場4区 動物（馬・鳥）・人物（力士等）・器財（家・盾）		註13
6				6c前	頭部（角・耳の表現）～体部・脚部			註13
7		昼神車塚古墳	前方後円墳／全長56m	6c中	角・体部・脚部破片	動物（犬・猪）・人物（力士等）		註13
8	大阪府守口市	梶2号墳	帆立貝式古墳／全長29.7m	6c前	頭部と体部	動物（犬・猪・鳥）・人物・器財（家・大刀等）		註2a，註14b・c
9	奈良県田原本町	羽子田1号墳	前方後円墳／全長30m	6c前	頭部～体部（角と3本の脚欠損）	人物（盾持）	明治30（1987）年に出土	註2a，註14b，註15，註16
10	京都府木津川市	音乗谷古墳	前方後円墳／全長22m	6c前	頭部～体部・脚部	動物（馬・犬・鳥）・人物・器財（玉杖・蓋等）		註17
11				6c前	頭部			註17
12				6c前	頭部（角の表現）			註17
13	千葉県印西市	小林1号墳	円墳／墳径18m	6c中	頭部	動物（馬・猪）・人物		註2a
14	千葉県横芝光町	殿塚古墳	前方後円墳／全長88m	6c中～後	顔面（角の表現）	動物（馬・犬）・人物		註21a・b

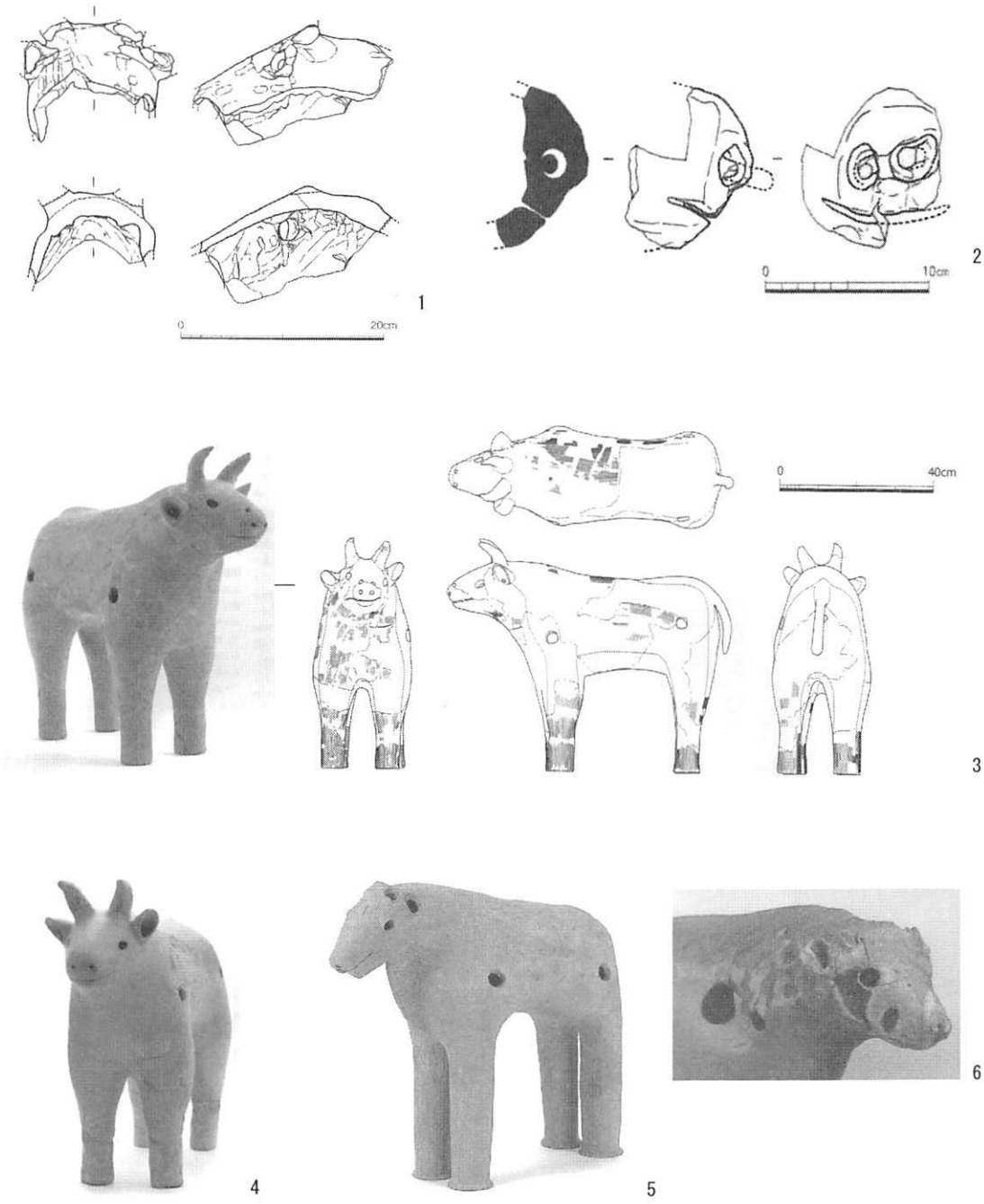
表2　『延喜式』巻28・兵部省式の牛牧・馬牛牧

国名	牛牧名
武蔵国	神埼牛牧
上総国	負野牛牧
下総国	浮嶋牛牧
周防国	垣嶋牛牧
長門国	角嶋牛牧
筑前国	能臣嶋牛牧
肥前国	柏嶋牛牧
	早埼牛牧
日向国	野波野牛牧
	長野牛牧
	三野原牛牧

国名	馬牛牧名
相模国	高野馬牛牧
備前国	長嶋馬牛牧
伊予国	忽那嶋馬牛牧

グラフ1　牛形埴輪の出土地





1：四条7号墳　2：船宮古墳　3・4：今城塚古墳　5：羽子田1号墳　6：梶2号墳

図1　牛形埴輪-1（註9・13・14c・16・17文献から・写真は縮尺不統一）

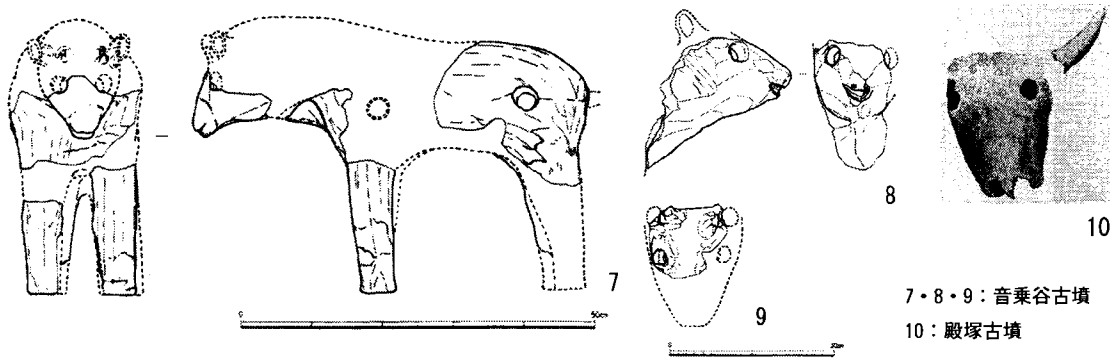


図２　牛形埴輪 -2（註 17・21b 文献から・写真は縮尺不統一）

牧」の存在が認められる。下総国では，のちの牛牧に発展するような牛の飼育管理が，すでに５世紀後半～６世紀に行われていた可能性が示唆される。

次に，各出土古墳及び時期別に，牛形埴輪の出土状況とその特徴を確認し，牛形埴輪の有する特性を抽出していきたい。

５世紀後半の四条７号墳では，外周溝（SD08）・河道（SD147）などから，牛形埴輪１点の出土が確認されている。牛形埴輪には，馬形・鹿形・猪形の動物埴輪や力士などの人物埴輪，家形埴輪，盾などの器財埴輪が共伴して出土している。四条７号墳の形象埴輪の多くが，藤原宮期に相当する整地土から出土していることから，墳丘での配列状態の復原は困難である。牛形埴輪は，頭部上半～頸部のみが残存する破片であるが，頭部上半には角と耳が立体的に表現され，頸部から背に向かって背骨を現した稜線がみられる[9]。

船宮古墳からは，牛形埴輪の鼻と口の部分と推定される破片が出土している。鼻には，鼻環の表現が見られる[10]。

６世紀前半の資料としては，近畿地方の大日山35号墳（全長105mの前方後円墳・和歌山県和歌山市）及び鳴神埴輪窯跡（和歌山県和歌山市），今城塚古墳（全長350mの前方後円墳・大阪府高槻市），梶２号墳（全長29.7mの帆立貝式古墳・大阪府守口市），羽子田１号墳（全長30mの前方後円墳・奈良県田原本町），音乗谷古墳（全長22mの前方後円墳・京都府木津川市）からの出土が確認されている。

大日山35号墳では，墳丘括れ部の東と西に造り出し施設が配置され，東造り出しから牛形埴輪１点の出土が確認されている。東造り出しからは，馬形・猪形・犬形の動物埴輪や翼を広げた鷹と推定される鳥や水鳥といった鳥形埴輪，力士などの人物埴輪，家形埴輪，大刀などの器財埴輪，須恵器大甕などが出土している。円筒埴輪で囲まれた東造り出しの形象埴輪群の配列復原では，墳丘側から２羽の水鳥に続き，牛・犬・猪の順列で配列され，牛形埴輪は，動物埴輪群による配列構成の一角に位置付けられる（図３）。大日山35号墳の牛形埴輪は，顔面部と脚部を欠損した破片であるが，顔面には目，頭部には耳と角に相当する部分が表現されている[11]。

また，鳴神埴輪窯跡では，牛形埴輪の角の可能性がある破片１点の出土が確認されている[12]。

今城塚古墳は，二重周溝を有する大型前方後円墳で，継体天皇の陵墓と考えられている。内堤北側の張出区画に設置された埴輪祭祀場では，200点以上におよぶ形象埴輪群が配列される。その最も南側の区画である４区から牛形埴輪２点の出土が確認されている。墳丘側に設置された円筒埴輪列に並行する水鳥埴輪列に並行して，２列に配列された馬形埴輪の外側列の最後尾に牛形埴輪が配列される。同じ４区内には，力士や鷹匠の人物埴輪，鶏形埴輪，盾形埴輪及び家形埴輪が配置され

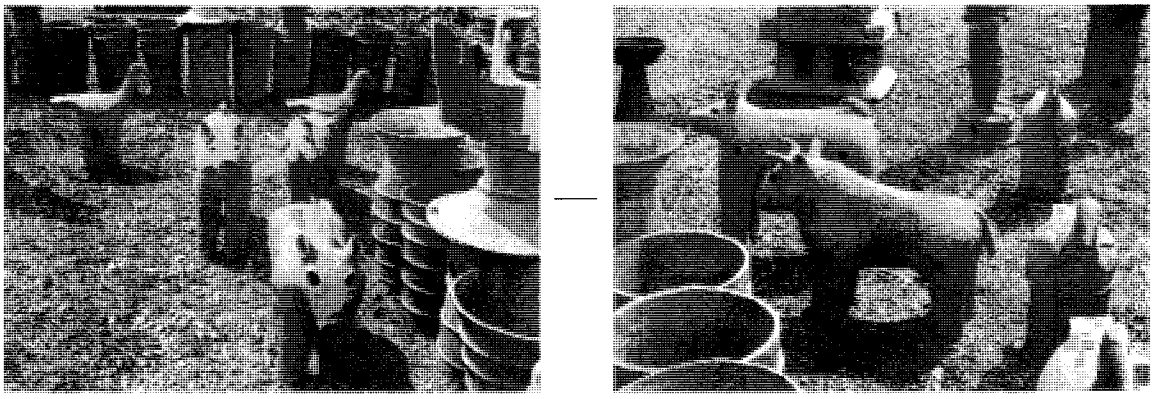


図3　大日山35号墳・牛形埴輪の復原配列
(猪形埴輪・犬形埴輪に続き牛形埴輪が配列・写真は筆者撮影)

ている(図4)。牛形埴輪2点は，その全体像が理解できるように復元がなされている。1点目は長さ74cm・幅26cm・高さ59cmで，2点目は長さ69cm・幅27cm・高さ65cmを測る。体部から伸びる太くて短い頸によって頭部へと続き，頭部には耳と角が立体的に表現されている。角は，短い角であるが，やや前向きに曲がっている。顔面には目と鼻孔が孔によって表現されるが，口はヘラ状工具

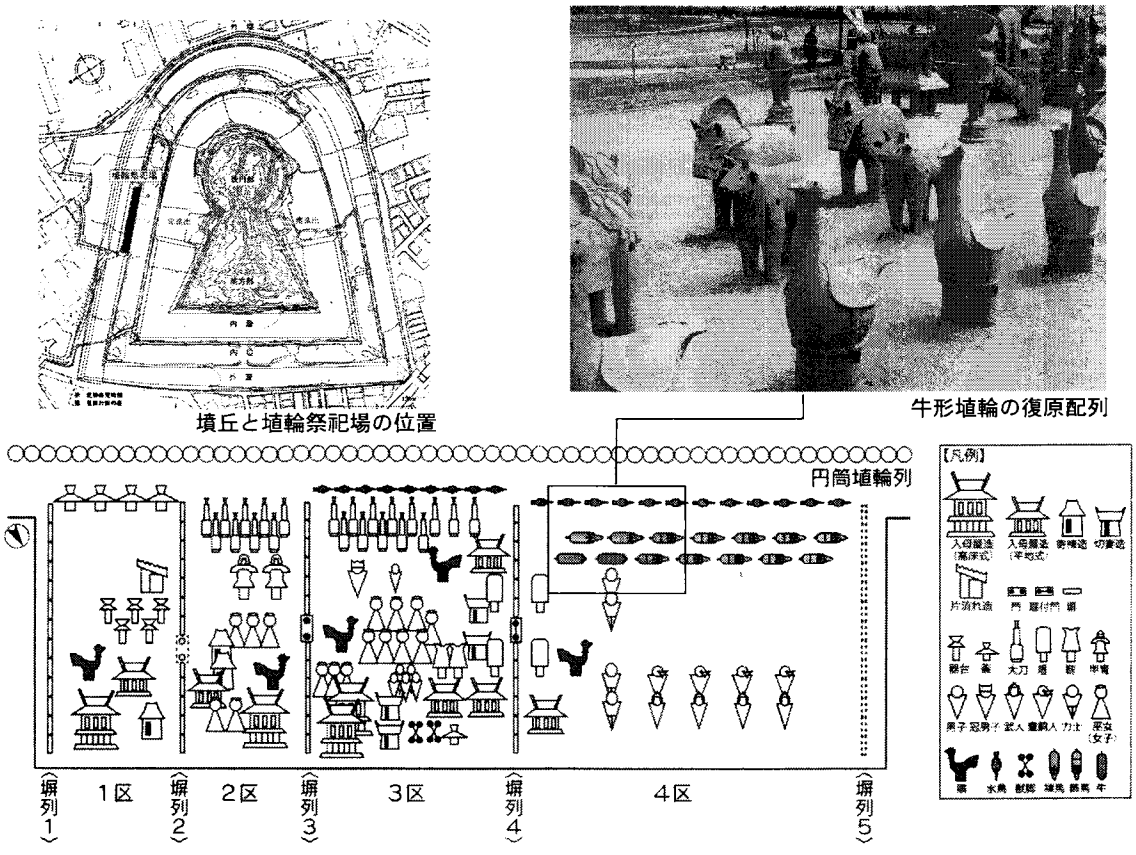


図4　今城塚古墳の埴輪祭祀場の構成と牛形埴輪の配列
(註11b・13文献から作成・写真は筆者撮影・一部加筆)

による深い横長の沈線で表現されている。鼻孔の上には，紐などを通したような二つの孔があり，鼻環を表した可能性が考えられる。体部は丸みをおびてやや太く，脚部は大腿部が大きく膨らむが，下端は真っ直ぐな筒状に表現されている。蹄の表現は見られない[13]。

梶２号墳では，犬形埴輪や猪形埴輪のほか，鳥形埴輪，人物埴輪，大刀形埴輪などの器財埴輪や家形埴輪とともに，牛形埴輪が確認されている。牛形埴輪は，角が欠けているが，頭部～体部までが残っており，全身像として復元がなされている[14]。

羽子田１号墳からは，明治30（1987）年の病院建設工事の時に，盾持人物埴輪と牛形埴輪が出土している。近年の調査によって，前方後円墳である可能性が指摘されている[15]。牛形埴輪は，角と脚部の一部を欠くが，ほぼ全体像を見ることができる。今城塚古墳の牛形埴輪と同様に，欠けてはいるものの，耳と角が立体的に表現されていたことがわかる。顔面は目が孔によって表現され，口はヘラ状工具による横長の沈線で表現されている。体部は丸みをおび，力強く表現されている[16]。

音乗谷古墳では，南掘割から牛形埴輪３点が出土している。そのなかで，首の皮のたるみが表現された牛形埴輪１点の復元がなされている。長さ56.8cm・高さ39cmで，今城塚古墳の牛形埴輪に比べて，小型である。ほかに２点の牛形埴輪の頭部が認められ，うち１点には角の表現が見られる[17]。

６世紀中頃の資料としては，近畿地方の昼神車塚古墳（全長56mの前方後円墳・大阪府高槻市），関東地方の小林１号墳（墳径18mの円墳・千葉県印西市）からの出土が知られている。

昼神車塚古墳からは，今城塚古墳の牛形埴輪に似た脚部１点のほか，角とみられる破片の出土が知られている[18]。昼神車塚古墳では，力士や角笛を吹く人物（猪甘）などの人物埴輪のほか，犬形埴輪及び猪形埴輪が列状に配列されていたことがわかっている[19]。

小林１号墳では，馬形埴輪や猪形埴輪のほか，人物埴輪の出土が知られている。小林１号墳の牛形埴輪は，頭部のみの破片である[20]。

６世紀中頃～後半の資料としては，関東地方の殿塚古墳（全長88mの前方後円墳・千葉県横芝光町）からの出土が知られている。

殿塚古墳では，墳丘中段面に配列された馬形埴輪・犬形埴輪・鹿形埴輪・猪形埴輪といった動物埴輪群の中のひとつとして牛形埴輪が確認されている。男女の人物埴輪の配列も確認されている。殿塚古墳の牛形埴輪は，顔面と角だけの破片である。顔面は目が孔によって表現され，角は短いが曲がっている[21]。

牛形埴輪の墳丘での配列状況は，馬形埴輪や犬形埴輪・猪形埴輪などの動物埴輪群の中のひとつとして配列される傾向が指摘でき，同一空間に配置される形象埴輪は，鳥形埴輪・力士などの人物埴輪・大刀形埴輪や盾形埴輪などの器財埴輪・家形埴輪である傾向が指摘できる。牛形埴輪は，動物・鳥・人物・器財・家などが一連（１セット）となった形象埴輪群を有する古墳においてのみ樹立されていたものといえる。この点が，全国的に見て出土数が極端に少ない要因のひとつとしても考えられる。牛形埴輪の最も大きな特徴は，頭部に短いが曲がった角が表現されている点であるといえ，ほかには力強く丸みをおびた体部と大腿部が膨らんだ脚部や，足先となる端部に馬形埴輪に見られる蹄の表現がないことも特徴のひとつといえる。

馬形埴輪に伴う馬飼に相当する人物埴輪の配置は見られず，牛甘（飼）を表現した人物埴輪の存在を窺い知ることはできない。

(2)　装飾古墳の牛と想定できる図文

次に，装飾古墳で描かれた図文に関して検討を行いたい。装飾古墳で描かれた図文は，写実性に欠けた抽象的な描写のものであるが，馬や鹿・猪などを表した動物図文を見ることができる。動物図文では，九州地方の弁慶ガ穴古墳（墳径約15mの円墳・６世紀後半・熊本県山鹿市）[22]などで描かれている舟に乗るものも含めて，馬を表したものがその大半を占める[23]。明確に牛と指摘できる図文は見当たらないが，牛を表した可能性を指摘できるものがある。

牛の最大の特徴は，角と体型である。牛の角は，前頭骨が著しく伸び出した角突起を角鞘（角表皮）で被ったものである[24]。また，その体型は馬と比べて丸みをおびてずんぐりとしている。

九州地方の五郎山古墳（墳径35mの円墳・6世紀後半・福岡県筑紫野市）の横穴式石室の奥壁下段西寄りに描かれた動物2点（2点ともに同じ動物で，馬か犬と想定されている[25]。）は，同じ壁面に描かれた騎馬人物の馬2点の描写と比べると，頭部にある短い角（耳を表したものかもしれないが）と丸みをおびてずんぐりとした体型の描写には，明らかに相違点を見いだすことができ（図5）[26]，馬を描写した可能性が低いものと考えられる。本資料は，斎藤忠による装飾古墳の図文集成では，「馬など」に分類され，提示された図の顔面に角状の突起が描かれている[27]。五郎山古墳の奥壁下段西寄りに描かれた動物2点は，狩猟の対象である鹿や猪，そして猟犬を描いた可能性が考えられるが，牛が描かれた可能性も考えられる。

また，東海地方の兎沢9号墳（墳径6.0～7.5mの円墳・7世紀・静岡県焼津市）の奥壁下段に，線刻によって描かれた猪（豚）と想定されている図も，角や体型の描写からは，牛を描いた可能性を指摘することができる（図6）[28]。

以上が，数少ないながらも，装飾古墳で描かれた動物図文の中で，牛を表した可能性が指摘できるものである。

五郎山古墳の築造された地域は，旧国名では筑後国に相当する。『延喜式』諸国馬牛牧の牛牧・馬牛牧と比較すると，筑後国に兵部省が管理する牛牧は認められないが，隣接する筑前国に「能臣嶋牛牧」，肥前国に「柏嶋牛牧・早埼牛牧」の存在が認められる。九州北部の地域に，3カ所の牛牧の存在が認められることから，すでに6世紀以前に，この地域で牛の飼養・飼育及び管理が行われていたことが十分に考えられる。

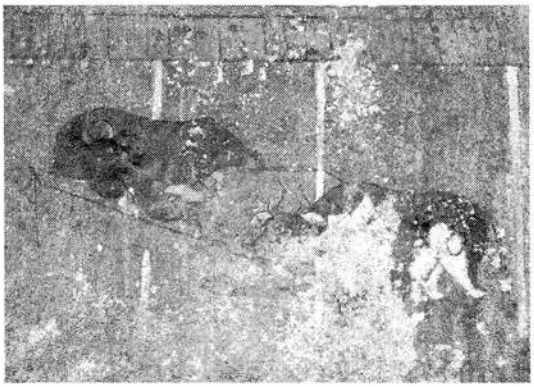
(3) 高句麗壁画古墳で描かれた牛図

朝鮮半島の考古資料である高句麗壁画古墳の壁画図は，日本の形象埴輪や装飾古墳で描かれた図文などの比較研究の対象として，非常に有効性が認められる[29]。高句麗壁画古墳は，高句麗王を中心とした高句麗の支配者層の墓で，高句麗が二番目に都を置いた集安（中国吉林省集安市）と，三番目に都を置いた平壌周辺（北朝鮮黄海南道安岳郡・平安南道南浦市）で多く築かれている。初期の壁画には，生活風俗図及び狩猟図などが描かれる場合が多いが，4世紀以降になると，生活風俗図に加えて，仏教図（蓮華文）・四神図が盛んに描かれるようになる。6世紀に入ると，四神図のみが描かれるようになるのが壁画内容の変遷の特徴である[30]。

高句麗壁画古墳で描かれた牛図に関しては，牛舎や牛轎車のほかに，牽牛織女図が見られる。本節では，集安及び平壌周辺の古墳で描かれた牛に

図5　五郎山古墳の復原壁画図（註24文献から）

図6　兎沢9号墳の壁画図（註26文献から）



1

2

3

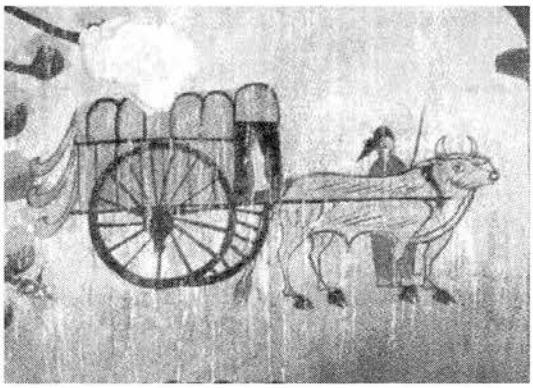
1：安岳３号墳　2：薬水里古墳　3：徳興里古墳

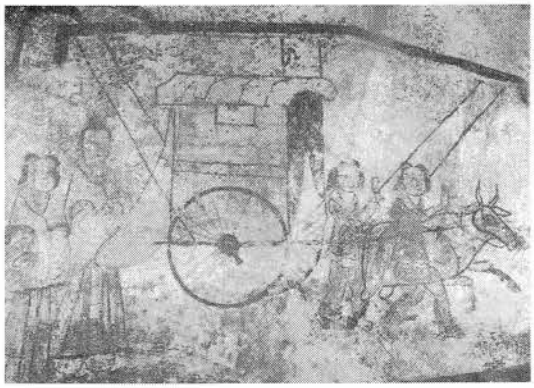
図７　高句麗壁画古墳の牛舎図（註 31・32b・34b 文献から）

関連した代表的な図を紹介し，その内容について検討を図っていきたい。

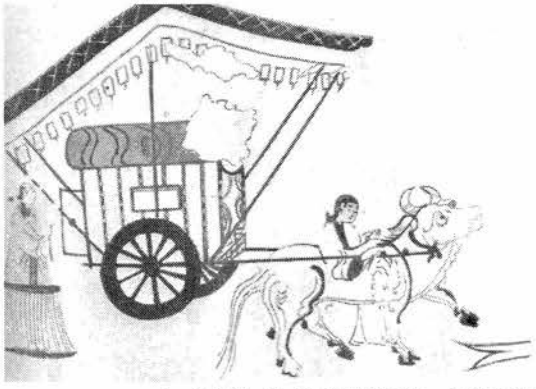
安岳３号墳（南北33m×東西30mの方台形墳・４世紀後半［永和13（357）年銘墓誌］・北朝鮮黄海南道安岳郡）の埋葬施設は，羨道・羨室・両側（西側と東側）に側室の付いた前室・奥室・回廊によって構成される横穴式石室（各室の天井は隅三角持ち送り構造）で，高句麗で築造された古墳の中では最も複雑な構造を呈している。西側室への入口となる前室の壁面に，墓誌が墨書で書かれている。墓誌銘から，墓主（被葬者）は，中国遼寧省蓋平県出身の「冬壽」という人物であったことがわかっている[31]。墓主（被葬者）像は，前室西側室の奥壁（西壁）に描かれ，前室東側室では，厨房・井戸・車庫といった生活風俗図が描かれているが，その中に厩や牛舎の図を見ることができる。前室東側室の南壁面に描かれた牛舎内には，３頭の牛が描かれている（**図7-1**）。いずれも赤色で塗られた短い角を有する牛で，黄牛であったことが予測できる。

同じく牛舎が描かれた古墳としては，薬水里古墳（規模墳形不明・４世紀末～５世紀初頭・北朝鮮平安南道南浦市）がある。埋葬施設は，前室と奥室から構成される二室構造の横穴式石室で，天井は穹窿形でその上に隅三角持ち送り天井と頂石が積まれている。壁画は，厚く漆喰を塗った上に描かれている。牛舎図は，前室下段部に厩の図などとともに描かれる。瓦葺きと推定される牛舎内には，２頭の牛が描かれ，その傍らに人物図が描かれているが，とても小さく描かれていることから詳細はわからないが，牛を世話する人物を描いた可能性も考えられる（**図7-2**）[32]。描かれた牛は，安岳３号墳と同様に短い角を有する牛で，黄牛と想定できる。


1


2

3


4

1：舞踊塚　2・3：徳興里古墳　4：双楹塚

図8　高句麗壁画古墳の牛轎車図（註31・32a・34b文献から）

舞踊塚（一辺17mの方台形墳・4世紀末～5世紀初頭・中国吉林省集安市）では，前室と奥室から構成される二室構造の横穴式石室の奥室（天井は3段の平行持ち送りの上に平行と隅三角を組み合わせた八角形の5段持ち送り構造）の左側壁に，牛轎車図が描かれている。牛は，内湾した短い角や乳房などが表現されており，愛らしい印象的な風貌で，黄牛が描かれたものと推定される。また，轎車を引く牛の傍らには，牛を牽く黒い頭巾を被った人物の図（御者）が描かれている（図8-1）[33]。御者は，牛甘（飼）である可能性が考えられる。

徳興里古墳（規模不明の方台形墳・5世紀初頭［永楽18（408）年銘墓誌］・北朝鮮平安南道南浦市）では，前述した薬水里古墳前室と同様に，前室と奥室から構成される二室構造の横穴式石室が，埋葬施設として採用されている。壁画は，白い漆喰

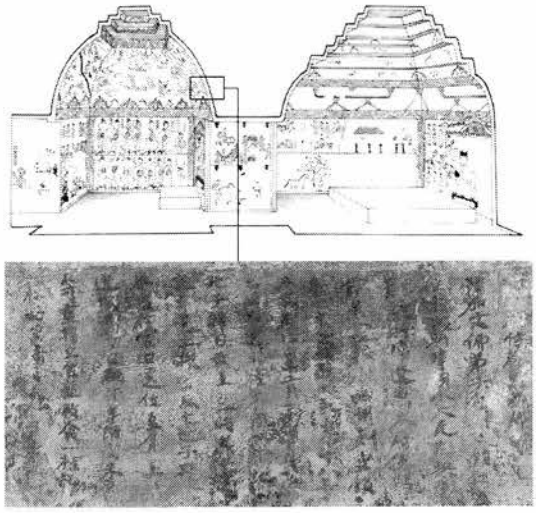


図9　徳興里古墳の石室と墓誌銘
（註34b文献から・一部加筆）

で塗られた壁面及び天井全面に描かれている。前室の北壁西側の中央部に墓主（被葬者）像が描かれ，天井は穹窿形でその上に平行持ち送りと頂石が積まれている。前室天井には，狩猟図・神仙及び神獣図・北斗七星などの日月星辰図が描かれ，墓誌銘が記されている[31]。天井北側に書かれた墓誌銘から，墓主（被葬者）は「釋加文佛弟子」（仏教徒）である信都県（中国河北省衡水市冀州区）出身の「鎮」という人物であることがわかっている（**図9**）。

徳興里古墳で描かれた牛図に関しては，牛舎や牛轎車図のほかに，牽牛織女図がある。牛舎図は，奥室の南壁下段部で見ることができ，牛舎内には，２頭の牛とその後方に牛轎車が描かれている（**図7-3**）。牛舎図の上段部には，厩の図が描かれており，馬を世話する人物も描かれている。更

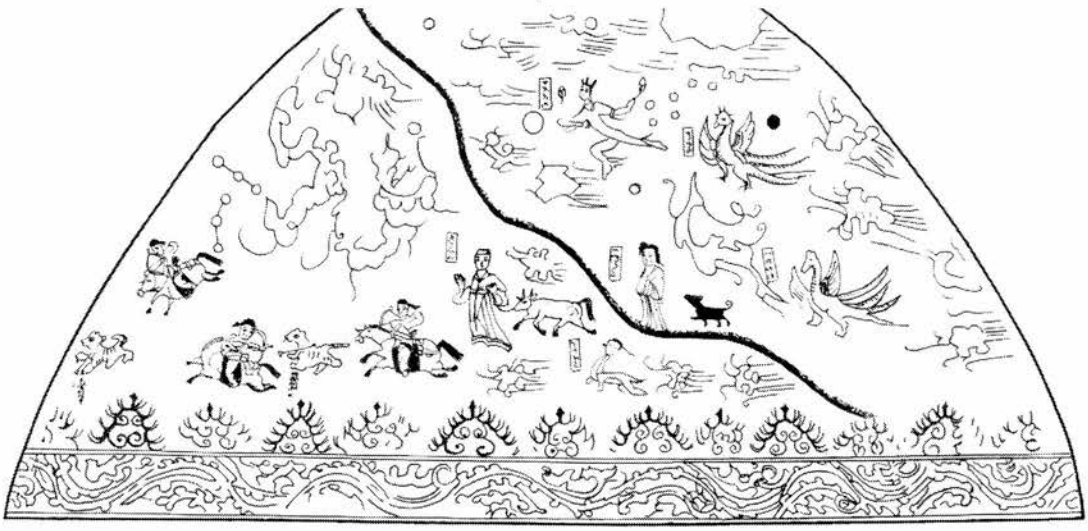


図10　徳興里古墳の前室天井南側壁画（註34b文献から）

に，前室と奥室を繋ぐ通路東壁上段部及び奥室北壁東側で，女主人公の牛轎車図が見られ，轎車を引く牛の傍らに，牛を牽く人物（御者）の図が描かれている（図8-2・3）。この牛を牽く人物（御者）は，「輪のように髪を編んで横につけた」[35] 頭髪が特徴的で，牛甘（飼）の可能性が高いと考えられる。

次に，牽牛織女図を見ておきたい。牽牛織女図は，徳興里古墳の前室天井南側の中央部で描かれている（図10）。曲線状に描かれた一条の天の川を境にして，向かって左側に描かれた牽牛は，白色の高冠に黄色の長外衣をまとい，淡緑色の牛を牽いている。天の川を隔てて向かって右側の位置に描かれた織女は，淡黄色のチョゴリに緑と白の彩りのチマの姿で，牽牛をながめて佇むように描かれている。織女の後方には，織女に従うように黒犬が描かれている（図11）[36]。この図は，高句麗がより広い世界との交流があったことを物語る事象であるとともに[37]，５世紀初頭の高句麗国内で，牽牛織女説話が定着していたことを示している[38]。また，牽牛が牽く牛については，奥室で描かれた牛舎内の牛とは明らかに描き方が異なっている。牛の頭部の輪郭と耳・角，足先を強調した愛嬌のある描き方は，前述した牛轎車の牛の描き方と同様である。牛轎車の牛と牽牛織女の牛は，同一人物によって描かれた可能性が指摘できる。

最後に，双楹塚（規模墳形不明・5世紀末・北朝鮮平安南道南浦市）の牛轎車図を見ておきたい。双楹塚でも，前室と奥室から構成される二室構造の横穴式石室が採用されている。壁面は自然石で構築されているが，表面は天井まで厚く漆喰が塗られ，壁画が描かれている。牛轎車図は，羨道東壁で描かれている。風鈴をずらりと付けた豪華な牛轎車で，牛も品格あるように豪華に描かれている（図8-4）[39]。また，牛に伴う人物（御者）と轎車の後方にも人物（従者）が描かれている。御者は，牛甘（飼）である可能性が考えられる。

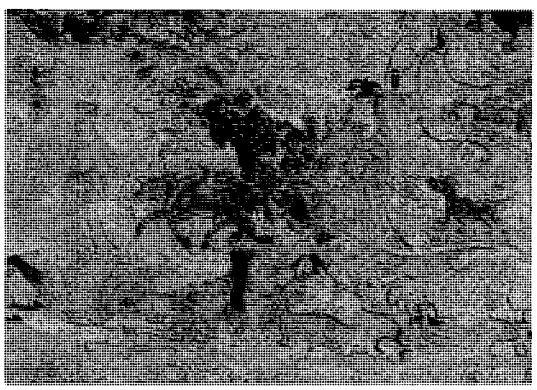


図 11　徳興里古墳の牽牛織女図（註 34b 文献から）

また，安岳１号墳（南北17m×東西13mの方台形墳・５世紀前半・北朝鮮黄海南道安岳郡）の玄室天井部の壁画では，怪奇な姿を持った人頭牛の図が描かれている[40]。安岳１号墳の天井部で描かれた怪奇な獣類の図は，仏教的色彩が強い高句麗の宗教的観念の表れと言われている[41]。

以上，高句麗壁画古墳の中で，牛図が描かれた代表例となる古墳について紹介した。高句麗壁画古墳での牛図では，厩と牛舎が一連となって描かれる点が特徴として指摘できる。更に，角の長さから判断して，家畜として飼われていた牛は，黄牛と推定できる。また，牛轎車図で，頭髪（黒頭巾及び輪髪など）に特徴を持った人物が，牛甘（飼）と推定できよう。

(4) 埴輪・壁画資料の検討結果から－共通点と相違点の抽出－

以上の検討結果から，牛形埴輪は，馬形埴輪などの動物埴輪群のひとつとして配列されていることが理解できた。また，牛形埴輪と同一空間に配列された形象埴輪群としては，鳥形埴輪や力士などの人物埴輪，器財埴輪や家形埴輪であったことが理解できた。牛形埴輪は，前述のとおり，動物・鳥・人物・器財・家などが一連（１セット）となった形象埴輪群を有する古墳において樹立されていたものといえる。古墳の配列状況からは，残念ながら，牛甘（飼）を表現した人物埴輪の存在を窺い知ることはできなかった。

牛形埴輪は，現状では近畿地方の四条７号墳が最も古い資料で，５世紀後半～６世紀代にかけて，近畿地方と関東地方の一部の古墳でのみ確認

できる。牛形埴輪は，５世紀後半には，日本で牛の飼養・飼育及び管理が行われていたことを証明する資料である。牛形埴輪の検討結果を肯定する動物遺存体としては，前述のとおり，近畿地方の南郷大東遺跡（奈良県御所市）から５世紀のウシ臼歯４点が出土している[42]。５世紀以前のウシについては，関東地方の伊皿子貝塚遺跡（東京都港区）の２号方形周溝墓から，弥生時代のウシ頭蓋骨などの出土が報告されている[43]が，古墳時代以降のものである可能性が指摘されている[44]。さらに，６世紀以降のウシ遺存体については，近畿地方の郡家遺跡（兵庫県神戸市）のウシ下顎骨[45]や長原遺跡（大阪府大阪市）のウシ四肢骨[46]，関東地方の鉞切遺跡（神奈川県横須賀市）のウシ頭蓋骨[47]など，儀礼にウシの一部を用いた例が知られるようになる。６世紀以降になると，近畿地方を中心にして，関東地方や四国・九州地方などでも出土例が増加する[48]。

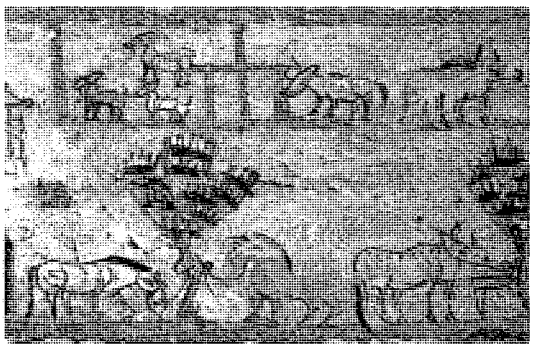
また，『日本書紀』巻第18・安閑天皇２（535）年９月条に「丙辰，別勅大連云，宣放牛於難波大隅嶋与媛嶋松原。冀垂名於後。」（丙辰，別に大連に勅して，「牛を難波の大隅島と媛島松原とに放牧せよ。望むらくは，名を後世に伝えたい。」と仰せられた。）と記されている[49]。牛形埴輪やウシ遺存体の出土例と併せて，５～６世紀にかけて，近畿地方で牛の放牧がなされていたことがわかる。なかでも難波（大阪府大阪市）の地が，新たに渡来した動物の飼養・飼育の地としての役割を担っていたとの指摘もある[50]。

装飾古墳の図文では，明確に牛を表したものは見られないが，数は少ないながらも，６世紀以降に描かれた動物図文の中に，牛を表した可能性が指摘できるものがある。この図文のある古墳があった地域には，『延喜式』諸国馬牛牧にみえる牛牧があり，６世紀以前から牛の飼育・管理が行われていた可能性があることも，この指摘を説得力あるものにする。

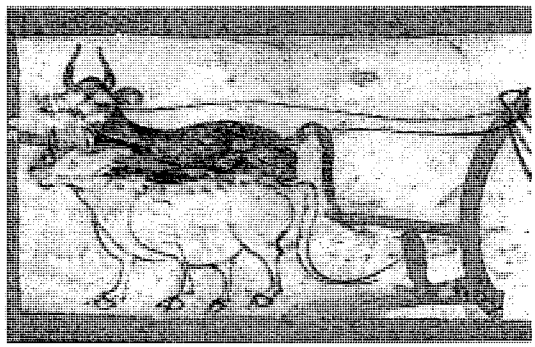
高句麗壁画古墳の牛図では，４世紀後半～５世紀初頭の図の中に，牛舎と牛轎車，牽牛織女図を見ることができた。高句麗壁画古墳の牛舎図は，前述のとおり，厩と牛舎が一連となって描かれる点が指摘でき，高句麗では，馬と牛が一連となって飼養・飼育及び管理がなされていたことが理解できる。高句麗壁画古墳以前に築造された中国大陸の墓室壁画に目を向けると，魏の新城１号墳（３世紀前半～後半・中国甘粛省嘉峪関市）では，牛と馬の一連となった飼養・飼育の状況（図12）や，同５号墳（３世紀前半～後半）で畠を耕す牛と放牧された馬の姿などを見ることができる[51]。馬と牛の一連となった飼養・飼育の形態は，高句麗だけに限らず，中国大陸や朝鮮半島で普遍的な姿であったことが理解できる。

さらに，牛轎車図からは，牛甘（飼）と推定できる人物像を認識することができた。

日本の牛形埴輪を中心とした考古資料と高句麗壁画古墳の牛図との共通点は，馬と牛の一連とな



1



2

1：新城１号墳・牛と馬（前室東壁）　2：新城５号墳・牛耕（前室東壁）

図12　魏墓室壁画の牛図（註51文献から）

った飼養・飼育及び管理である。高句麗での馬と牛の一連となった飼養・飼育及び管理の形態は，5世紀後半以降の日本においても同様であったことが予測できる。榛名山の噴火による軽石で埋没した黒井峯遺跡（6世紀中頃・群馬県渋川市）では，集落内で家畜小屋が見つかっている。家畜小屋で飼われていた家畜の種類としては，馬及び牛の存在が指摘されており[52]，馬と牛の一連となった飼養・飼育及び管理の形態に合致する。

また，牛形埴輪の形状からは，日本へ渡来した牛は，黄牛の一種と予想されるが，日本の在来牛としては，見島牛（国指定天然記念物・山口県萩市）や口之島牛（鹿児島県十島村）が知られている（**図13**）。在来牛は，体高1.2m前後の牛としては小柄牛であるが，DNA分析では，ホルスタイン種に近い北方系の牛が起源とされている[53]。高句麗壁画古墳で描かれた牛の一種が，日本に渡来した牛である可能性が高いものと考えられる。

相違点については，高句麗壁画古墳では牛甘（飼）を伴う牛轎車が描かれているが，日本の牛形埴輪の配列状態や装飾古墳の図文からは，牛甘（飼）や牛轎車の存在を認識することはできないことである。日本では，都城である藤原京（奈良県橿原市・明日香村）や平城京（奈良県奈良市）から，物資運搬用の牛車（うしぐるま）に用いられた軛（くびき）などが出土しており（**図14**），奈良時代（8世紀）以前に，牛車（うしぐるま）が使用されていたことの指摘がなされている。しかしながら，乗用の牛車（ぎっしゃ）の出現は，平安時代に入ってからと考えられており[54]，5～6世紀にかけての，牛甘（飼）や牛轎車の存在を示す資料は見当たらない。

図13　在来牛の見島牛（筆者撮影）

4　牛の渡来と牛甘（飼）の特性

ここまでの考察を踏まえ，本章では，牛の渡来と牛甘（飼）の特性について考察し，本論のまとめとしたい。

先ずは，牛の渡来について考えたい。

5世紀後半の四条7号墳での牛形埴輪の存在からは，牛が5世紀後半以前に日本へと渡来し，すでに定着していたものであったことが理解できる。一方，日本での初期馬具の出土は，4世紀末～5世紀後半の時期に該当し，馬の飼養・飼育及び管理に伴う知識と技術は，朝鮮半島からの渡来人（集団）によって5世紀後半以前に持ち込まれたものであることは確実といえる[55]。

馬と牛の渡来は，時間的に見て大差がないものと考えられる。先述したように，高句麗でも日本でも馬と牛の一連となった飼養・飼育及び管理が認められるので，この時間的な近さは，馬と牛の飼養・飼育及び管理の知識と技術が，一連のもの

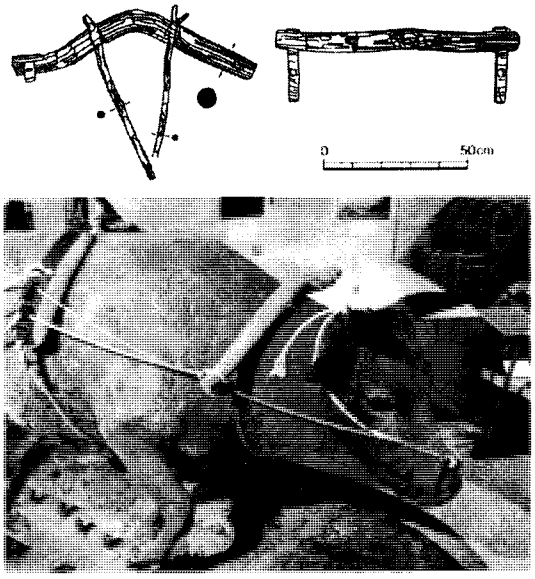


図14　藤原京出土の軛と軛の使用例
（藤原京の軛：註42文献から，写真は牛の博物館にて筆者撮影）

として朝鮮半島から日本に伝えられたことを意味していると考えるべきであろう。

次に，牛甘（飼）の特性を考えるにあたって，牛の利用について考えておきたい。

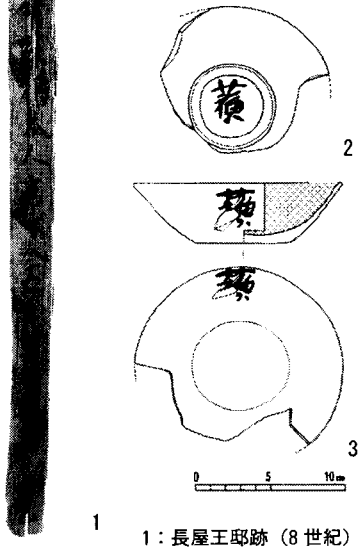
牛の利用としては，先ず，牛耕や牛車が考えられるが，牛耕については，水稲での極小区画水田から条里型方格地割の大区画水田への変化の理由として，牛馬耕の導入・普及が考えられている[56]。小区画水田に伴う小畦畔の消滅は，近畿地方で7世紀代，東海・関東・中部地方で8～9世紀代といわれている[57]。牛車については，前述のとおり，7世紀以降の都城を中心に，物資運搬用として牛車（うしぐるま）が使用されていたようであるが，乗用の牛車（ぎっしゃ）は，平安時代に入ってからと考えられている[58]。牛耕や牛車として，牛の利用が普及するのは，奈良時代（8世紀）以降と考えられる。

牛耕や牛車のほかに，牛の利用法としては，搾乳や乳製品，牛肉としての利用が考えられる。

搾乳については，近畿地方の長屋王邸跡（奈良県奈良市）から出土した長屋王家木簡（8世紀）の中に「牛乳持参人米七合五夕　受丙万呂九月十五日」と記されたものがある（図15-1）。牛乳を持参した丙万呂に，米が支給されたことがわかる。また，弘仁6（815）年に編纂された『新撰姓氏録』左京諸蕃下に，「和薬使主，出自呉国主照淵孫智聡也，……（略）……持内外典薬書，明堂図等百六十四巻，……（略）……男善那使主，……（略）……依献牛乳賜姓和薬使主」という記述が見られる。呉国の照淵の孫である智聡の子の善那が，孝徳天皇に牛乳を献じて，和薬使主の姓を賜ったことがわかっている[59]。

一方，乳製品については，平城京（奈良県奈良市）出土の二条大路木簡の中に，「参河国貢蘇」・「武蔵国進上蘇」・「上総国精蘇」・「美濃国蘇」と記された荷札木簡が見つかっている[60]。「蘇」は，現在でいうバターやチーズ・ヨーグルト・練乳・粉乳などの乳製品と考えられてきたが，近年の研究によって，牛乳を煮詰めて作るというその製法が判明し，バターや濃縮乳，あるいは全粉乳のようなものであったといわれている[61]。「蘇」の生産は，中部地方の吉田川西遺跡（奈良～平安時代の集落跡・長野県塩尻市）から出土した高台付き皿の底部外面（9世紀中頃・図15-2）や杯の外面（9世紀後半・図15-3）などに「蘇」と墨書された土師器が見つかったことで，諸国の牧で行われていたと考えられるようになった。吉田川西遺跡は，『和名類聚抄』（平安時代中期）に見られる信濃国の「埴原牧（はいばらのまき）」を管理した集落と考えられている[62]。

また，奈良時代には，典薬寮所属の乳長上・乳戸が，中央での搾乳や乳製品の加工を行っていたことがわかっており[63]，このことと善那への和薬使主姓の授与から，牛乳・乳製品は薬として使用されていたことが考えられる。そして，薬としての牛乳・乳製品の需要・供給は，中央の皇族や貴族層が中心で，軍馬生産としての馬の需要・供給とは違い，牛の頭数が少なかったことが推測できる。言い換えれば，牛乳や乳製品が，食品としての位置付けのなかった古代日本では，数多くの牛の生産の必要性がなかったといえる。牛形埴輪が，動物・鳥・人物・器財・家などが一連（1セ



1：長屋王邸跡（8世紀）
2・3：吉田川西遺跡（9世紀）

図15　「牛乳」木簡と「蘇」墨書土器
（註42・62a文献から）

ット）となった形象埴輪群を有する古墳においてのみ樹立されていることからも，継体天皇の陵墓である今城塚古墳を筆頭に，天皇や有力な首長のみが，牛の生産・保有に関係していたことがわかる。

さらに，牛乳・乳製品が仏教と深く関係している点も注意される。釈迦が乳粥で体力を回復した逸話があるように，牛乳・乳製品は僧侶に許された貴重な動物性の蛋白源であったし，『涅槃経』（3世紀末～4世紀初頭頃）には，修行過程の譬えとして，乳の五味といわれる乳・酪・生酥・熟酥・醍醐が前者から後者が生まれるという形で登場する。このような事情からか，仏教儀礼の施物・供物として乳製品が用いられたが，古代日本には醍醐が実在しなかったため，これには多く酥＝蘇が使われた[64]。仏教伝来以後はこうした乳製品需要があったものの，さほど大きいとは言えず，大量の牛を必要とする状況だったとはいえない。仏教伝来以前ならなおさらであろう。

一方，牛肉については，『日本書紀』巻第3・神武天皇即位前戊午年秋8月条に「已而弟猾大設牛酒以労饗皇師焉」（已にして弟猾，大きに牛酒を設けて皇師を労ぎ饗す。）という記事が見られる。天皇に反逆を企んだ菟田県（奈良県宇陀市付近）の首領であった兄猾が死に，弟猾が「牛酒」で，天皇の軍をねぎらう宴をひらいたことがわかる。牛酒とは，牛肉と酒という意味として解釈されている[65]。この記事からも，少なかったとは思われるが，牛肉が食されていたことがわかる。

5～6世紀の古墳時代の日本では，ここまで見てきたように牛の利用は限定的で，そのため牛そのものが極めて少なかったと想定され，それゆえに，馬甘（飼）に比べて，牛を専門的に取り扱った牛甘（飼）も極めて少なかったと考えられる。したがって，牛が渡来した当初は，馬甘（飼）が馬の飼育と一緒に，牛の飼養・飼育及び管理を行っていた可能性を指摘したい。このことは，本論で先に紹介した文献史料3の記事から推定される，馬甘（飼）と牛甘（飼）が明確に分化された存在でなかったことに相応し，牛甘（飼）の特性でもあったことを指摘したい。

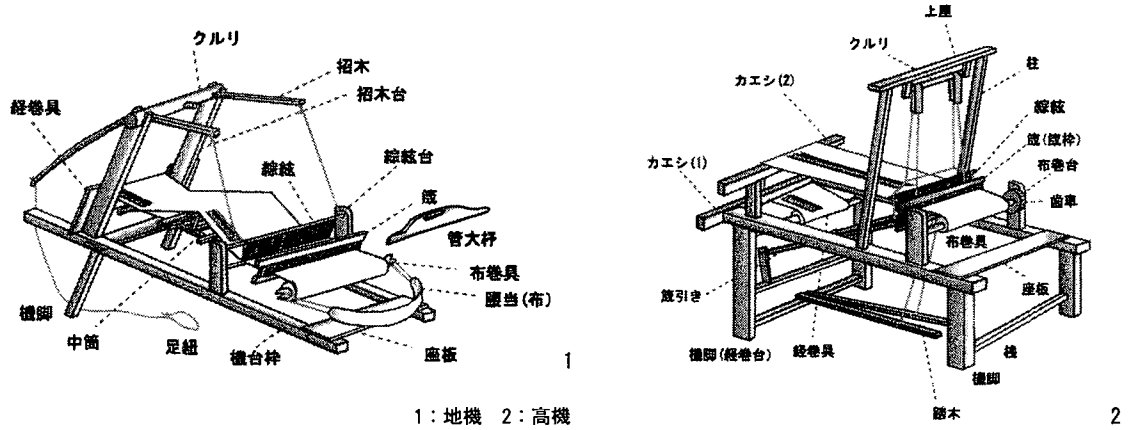
5　補論－牽牛織女説話の伝来年代をめぐって－

最後に，牛の渡来の問題と深いかかわりのある牽牛織女説話の伝来年代の問題について触れ，本論を補足しておきたい。

牽牛織女説話[66]の研究は，民俗学及び文学の分野を中心に進められ，日本の七夕説話の起源を，中国古典の『詩経』などに求める研究[67]や，日本の七夕説話と中国などの古典や説話との比較検討が行われてきた[68]。また，日本国内の伝承や史料・説話などを分析の対象とした研究[69]も進められてきた。民俗学や文学の研究を中心とした牽牛織女説話の伝来年代については，天平宝字3（759）年以降に成立した『万葉集』に収められた七夕説話を詠んだ歌の考察に基づいて，「遣唐使によってもたらされた漢籍によって，日本に七夕伝説や乞巧奠が伝わった」[70]ことが通説となっている。

一方，牽牛織女説話を考古学的手法によって検討した阪口有美子は，4～5世紀にかけての東アジア全体の人口移動に際して，日本に機織の技術とともに七夕説話が伝来したであろうという考え方を示している。阪口有美子の論文は，高句麗で築造された徳興里古墳の墓誌銘に記された墓主（被葬者）である「鎮」の系譜（出自）を，徳興里古墳の牽牛織女図で描かれた1頭の黒犬を媒介として，墓容鮮卑に由来したものとする考察が中心である[71]が，牽牛織女説話の伝来年代についても有力な見解を提示しているものと思われる。

日本の考古資料の中に，具体的に牽牛織女説話を示す資料は見当たらないが，機織りに用いられた地機（柱と板を組んで作った機台に経巻具・中筒・綜絖を固定・図16-1）や高機（経巻具・中筒・綜絖・布巻具などを機台に固定・図16-2）は，5世紀頃までに渡来人によってもたらされたものであることが考えられている[72]。6世紀後半ではあるが，関東地方の甲塚古墳（推定墳長80mの帆立貝式古墳・栃木県下野市）からは，地機を表した機織形埴輪が出土している。この機織形埴輪に



1：地機　2：高機

図16　機織りに使用された織機（註72文献から）

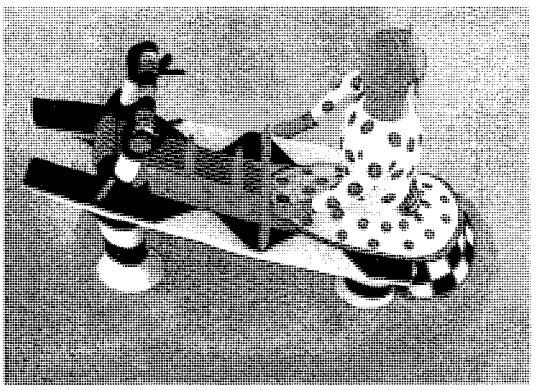


図17　機織形埴輪復原（註73文献から）

は，鮮やかな彩色が施されており，地機を操る女子人物座像が表現されている（図17）[73]。織機を操って，布を織る女性の姿が想像できる。『日本書紀』巻第2・神代下天孫降臨章第一ノ一書に「阿妹奈屢夜　乙登多奈婆多廼　汗奈餓勢屢　多磨廼弥素磨屢廼　阿奈陀磨波夜　弥多爾　輔柁和柁羅須　阿泥素企多伽避顧禰」（天なるや　弟織女の頸がせる　玉の御統の　あな玉はや　み谷　二渡らす　味耜高彦根）という容姿端麗である味耜高彦根神のことを詠んだ歌がある[74]。天上にいる棚織女（布を織る少女）の首に掛けている連珠の穴玉の美しさに，谷二つにわたって輝く味耜高彦根神のことを比喩して詠んだ2首の歌のひとつである。天上にいる棚織女（布を織る少女）という表現は，機織形埴輪の女子人物座像や牽牛織女説話の織女を連想させる。『日本書紀』の神代神話の中に，牽牛織女説話との繋がりが想像できる記述が認められることは，8世紀前半の『日本書紀』の完成段階には，牽牛織女説話が定着していた可能性を想起させる。

もう一つ，徳興里古墳の牽牛織女図と，日本の天人女房説話の表現に，共通要素があることを指摘しておきたい。日本の説話では，七夕説話と結び付いた天人女房説話（以下，犬飼七夕説話と呼ぶ。）がよく知られている[75]。犬飼七夕説話では，犬飼が七夕を追いかけて天に上がった際に，飼っていた犬（一説では黒犬）の活躍によって天まで上がれたことが理解でき，説話の中で，犬が大切な役割を担っている。徳興里古墳の牽牛織女図では，前述のとおり，織女の傍らに黒犬が描かれている。日本の犬飼七夕説話と，徳興里古墳の牽牛織女図では，犬という共通要素が見られる。中国大陸及び朝鮮半島の一部で，牽牛（彦星）星を犬飼星と呼び，犬飼七夕説話と因縁関係があることに関しては，既に指摘されていることである[76]。徳興里古墳の牽牛織女図では，黒犬が織女の傍らに描かれて，牽牛側に描かれてはいないという問題点はあるものの，徳興里古墳で描かれた牽牛織女図の黒犬と，犬飼七夕説話で活躍する犬といった共通点については，牽牛織女説話が，朝鮮半島から渡来したことを，示唆していると言えよう。

また，高句麗壁画古墳の犬図に関しては，集安

の角抵塚（一辺15.0mの方台形墳・４世紀末・中国吉林省集安市）の前室と玄室の間の通路左壁に，口を開けて歯を見せる首輪を付けた犬が描かれている[77]。また，平壌周辺の安岳３号墳の前室東側室の東壁や，集安の長川１号墳（墳形規模不明・５世紀中頃・中国吉林省集安市）の前室北壁においても犬が描かれている。長川１号墳では，野遊図に伴って走る犬と座る犬が描かれているが，双方ともに首輪を付けている[78]。徳興里古墳だけに限らず，高句麗壁画古墳では犬が描かれているものが存在する。牽牛織女図に黒犬が描かれていることを主な理由として，その墓主（被葬者）の系譜（出自）を安易に慕容鮮卑に結び付けることには疑問が生ずる[79]が，前述のとおり，阪口有美子の提示した牽牛織女説話の伝来年代（４～５世紀）に関しては，共感する[80]。

牽牛織女説話は，牛や織機の渡来や，徳興里古墳の牽牛織女図と日本の犬飼七夕説話との共通要素などを含めて考えると，７世紀以降の遣唐使によって中国からもたらされたと考えるより，５世紀後半以前の牛の渡来とともに，朝鮮半島から一連の文化複合として渡来したと考える方が妥当といえよう。

6　おわりに

馬とほぼ大差ない時期に渡来した牛ではあるが，多くの牛の生産を必要としなかった古代日本においては，当然ながら，牛の頭数も少なく，牛の飼養・飼育及び管理を専門に行う牛甘（飼）も少なかったことが考えられる。言い換えれば，馬甘（飼）による兼務によって，その役割が十分に果たせたことが，推定できるのである。このことが，馬甘（飼）に比べて，牛甘（飼）が専門集団として発達しなかった理由と考えられるが，むしろ，古代日本における牛甘（飼）の特性ともいえる。

また，牛飼が登場する代表的な説話である牽牛織女説話の伝来についても検討し，７世紀に遣唐使によって唐からもたらされたとの通説に対して，高句麗の徳興里古墳壁画の牽牛織女図と日本の犬飼七夕説話との共通要素などの分析から，５世紀後半以前の牛の渡来とほぼ大差ない時期に，朝鮮半島から日本へと伝わったと考える方が妥当との見解を示した。これにより，牛の渡来が，家畜とその生産・飼育技術だけではなく，関連説話などを伴う一連の文化複合として渡来した可能性をも示せたと思う。

【註】

(1) 白石太一郎「古代東国の牧と馬の文化」『東国の古墳と古代史』学生社，2007，pp.191～239.

(2) a. 亀井正道「人物・動物はにわ」『日本の美術』第346号，至文堂，1995

b. 若松良一「人物・動物埴輪」『古墳時代の研究 9 古墳Ⅲ・埴輪』雄山閣，1998，pp.108～150.

c. 若狭徹『もっと知りたいはにわの世界―古代社会からのメッセージ―』(株)東京美術，2009.

(3) a. 松井章「南郷大東遺跡出土の動物遺存体」『南郷遺跡群Ⅲ』奈良県立橿原考古学研究所，2003，pp.303～308.

b. 松井章「人間と家畜―動物考古学の立場から―」『野生から家畜へ』ドメス出版，2015，pp.195～220.

(4) 西本豊弘・新美倫子編『事典　人と動物の考古学』吉川弘文館，2010.

(5) a.『日本書紀』の読み下し及びその解釈は，小島憲之ほか校注・訳『新編日本古典文学全集　日本書紀』１～３，小学館，1994～1998. を参考にした。

b.『古事記』の読み下し及びその解釈は，山口佳紀・神野志隆光校注・訳『新編日本古典文学全集　古事記』小学館，1997.を参考にした。

(6) 天武朝（672～685年）の遣新羅使の出国から帰国までの期間は，『日本書紀』巻第29・天武天皇下によれば，(A) 4（675）年７月～５（676）年２月（大使：大伴連国麻呂，副使：三宅吉士入石）の７カ月，(B) 5（676）年10月～６（677）年２月（大使：物部連麻呂，小使：山背直百足）の４カ月，(C) 10（681）年７月～同年９月（大使：采女臣竹羅，小使：当摩公楯）の２カ月である。(D) 13（684）年４月～14（685）年５月（大使：高向臣麻呂，小使：都努臣牛甘）の13カ月が 実

に長期間であったことがわかる。

(7) 古畑徹「七世紀末から八世紀初にかけての新羅・唐関係―新羅外交史の一試論―」『朝鮮学報』第107号，朝鮮学会，1983，pp.1～73.

(8) 『日本書紀』巻第15・顕宗天皇即位前紀でも，「天皇曰，吾是去来穂別天皇之孫。而困事於人飼牧牛馬。」（天皇曰はく，「吾は是去来穂別天皇の孫なり。而るを人に困み事へて，牛馬を飼牧ふ。）と記される。「飼牧牛馬」の記述は，未分化であったことの裏付けといえよう。

(9) 鈴木裕明ほか『四条遺跡Ⅱ』奈良県立橿原考古学研究所，2010.

(10) a. 菱田淳子ほか『特別展 茶すり山古墳―巨大円墳に眠る但馬の王―』兵庫県立考古博物館，2010.
b. 渡辺大直「地域の宝・但馬牛物語5　埴輪になった牛朝鮮半島から渡来」『日本海新聞（2015年11月1日・但馬版）』新日本海新聞社，2015，pp.4.

(11) a. 丹野拓『平成20年度特別展　岩橋千塚』和歌山県立紀伊風土記の丘，2008.
b. 萩野谷正宏・仲原知之『平成23年度開館40周年記念特別展　大王の埴輪・紀氏の埴輪―今城塚と岩橋千塚―』和歌山県立紀伊風土記の丘，2011.
c. 和歌山県立紀伊風土記の丘編・発行『大日山35号墳東造出復元埴輪設置の軌跡』，2015.

(12) 註11a文献に同じ。

(13) 今西康宏・渡井彩乃『大王墓にみる動物埴輪』高槻市立今城塚古代歴史館，2015.

(14) a. 註2a文献に同じ。
b. 千賀久『特別展はにわの動物園Ⅱ―近畿の動物埴輪の世界―』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館，1991.
c. 内田真雄編『三島と古代淀川水運Ⅱ―今城塚古墳の時代―』高槻市立今城塚古代歴史館，2011.

(15) 唐古・鍵考古学ミュージアム編・発行『羽子田1号墳の新知見 平成22年度速報展解説シート』，2010.

(16) a. 田原本町教育委員会編・発行『田原本の遺跡5 田原本の埴輪』，2007.
b. 註13文献に同じ。

(17) 高橋克壽ほか『奈良山発掘調査報告Ⅰ―石のカラト古墳・音乗谷古墳の調査―』奈良文化財研究所，2005.

(18) a. 昼神車塚古墳調査会編・発行『昼神車塚古墳発掘調査概要（現地説明会資料）』，1978.
b. 富成哲也「大阪府昼神車塚古墳」『日本考古学年報（1976年版）』29，日本考古学協会，1978，pp.64～67（図版17～18）.

(19) a. 註2a文献に同じ。
b. 註14b文献に同じ。

(20) 註2a文献に同じ。

(21) a. 滝口宏「千葉縣芝山古墳群調査速報」『古代』第19・20号，早稲田大學考古學會，1956，pp.49～64.
b. 千葉県立房総風土記の丘編・発行『企画展 房総のはにわ』，1982.

(22) 原口長之「弁慶ガ穴古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』，熊本県教育委員会，1984，pp.52～55.

(23) 斎藤忠「装飾古墳とその図文」『斎藤忠著作選集』第3巻（古墳文化と壁画），雄山閣出版，1997，pp.129～247.

(24) a. 遠藤秀紀『アニマルサイエンス2 ウシの動物学』東京大学出版会，2001.
b. 註4文献に同じ。
c. 奥州市牛の博物館編・発行『角－進化の造形』，2014.

(25) 小田富士雄『国史跡 五郎山古墳―保存整備事業に伴う発掘調査―』筑紫野市教育委員会，1998.

(26) 国立歴史民俗博物館編『装飾古墳の世界』朝日新聞社，1993.

(27) 註23文献に同じ。

(28) 斎藤忠「兎沢古墳群9号墳の壁画の発見について」『笛吹段・兎沢古墳群』駿府博物館付属静岡埋蔵文化財調査研究所，1984，pp.66～68.

(29) a. 基峰修「馬飼について―日本列島における古墳時代渡来文化の検証―」『人間社会環境研究』第28号，金沢大学大学院人間社会環境研究科，2014，pp.127～145.
b. 基峰修「鷹甘の文化史的考察―考古資料の分析を中心として―」『人間社会環境研究』第30号，金沢大学大学院人間社会環境研究科，2015，pp.195～212.
c. 基峰修「力士考―考古資料分析による扁平鬙の解釈―」『人間社会環境研究』第32号，金沢大学大学院人間社会環境研究科，2016，pp.85～104.

d. 基峰修「猪甘と角笛―考古資料による比較検討を中心として―」『人間社会環境研究』第33号，金沢大学大学院人間社会環境研究科，2017，pp.93～113.

(30) 全虎兌「古墳壁画と高句麗文化」『高句麗の文化と思想』明石書店，2013，pp.307～324.

(31) 共同通信社編・発行『高句麗壁画古墳』，2005.

(32) a. 金基雄『朝鮮半島の壁画古墳』六興出版，1980.
b. 朝鮮画報社出版部編『高句麗古墳壁画』朝鮮画報社，1985.
c. 註31文献に同じ。

(33) a. 註31文献に同じ。
b. 註32a文献に同じ。

(34) a. 註32a・b文献に同じ。
b. 朝鮮民主主義人民共和国社会科学院・朝鮮画報社編『徳興里高句麗壁画古墳』講談社，1986.
c. 註31文献に同じ。
d. 南秀雄（大阪市文化財協会文化財研究部）編・発行『図像構成からみた高句麗前期の壁画古墳の特性と被葬者の出自の研究（平成17年度～平成19年度科学研究費補助金基礎研究（C）研究成果報告書)』，2007.

(35) 註34b文献に同じ。

(36) 註34b文献に同じ。

(37) 百橋明穂「東アジアの壁画芸術」『高句麗壁画古墳』共同通信社，2005，pp.54～59.

(38) 註34b文献に同じ。

(39) a. 金元龍『韓国美術全集４　壁画』同和出版公社，1974.
b. 註32a文献に同じ。

(40) 高句麗文化展実行委員会編・発行『高句麗文化展図録』，1985.

(41) 註32a文献に同じ。

(42) 北條朝彦「丑」『十二支になった動物たちの考古学』新泉社，2015，pp.21～34.

(43) a. 西中川駿ほか「第２号方形周溝墓西溝出土の家牛（Bos taurus）頭骨」『伊皿子貝塚遺跡』，港区教育委員会・伊皿子貝塚遺跡調査会，1981，pp.476～486.
b. 西中川駿（鹿児島大学農学部獣医学科）編・発行『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛，馬の渡来時期とその経路に関する研究（平成２年度文部省科学研究費補助金（一般研究B）研究成果報告書)』，1991.

(44) a. 村尾政人ほか『郡家遺跡第75次発掘調査報告書』郡家遺跡調査団，2004.
b. 註42文献に同じ。

(45) 註44a文献に同じ。

(46) 久保和士「動物遺体の調査結果と検討」『大阪市平野区長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅱ』（財）大阪市文化財協会，1999，pp.107～120.

(47) 小出義治ほか『鉞切遺跡―C・D地点の調査―』鉞切遺跡調査団・東アジア古代学会，1986.

(48) 註44a文献に同じ。

(49) 註5a文献に同じ。

(50) 積山洋「牛馬観の変遷と日本古代都城」『古代文化』第59巻第１号，古代学協会，2007，pp.40～55.

(51) 中国墓室壁画全集編集委員会編『中国墓室壁画全集１ 漢魏晋南北朝』河北教育出版社，2011.

(52) a. 石井克己ほか『黒井峯遺跡発掘調査報告書』子持村教育委員会，1990.
b. 白石太一郎ほか『古墳時代の研究』第４巻（生産と流通Ⅰ），雄山閣出版，1991.
c. 石井克己・梅沢重昭『日本の古代遺跡を掘る４ 黒井峯遺跡－日本のポンペイ』読売新聞社，1994.
牛の存在は，脂肪酸分析結果によるものであるが，その手法と結果に問題が生じて，現在，その科学的方法による証明は成されていないが，集落内に馬とともに牛が存在していた可能性は十分に考えられる。

(53) 馬の博物館・牛の博物館編『馬と牛』馬事文化財団・牛の博物館，2006.

(54) 註42文献に同じ。

(55) 註29a文献に同じ。

(56) 斎藤英敏「水田跡研究の新視点―群馬県における水田跡理解の現状―」『考古学研究』第50巻第２号，考古学研究会，2003，pp.43～58.

(57) 註56文献に同じ。

(58) 註42文献に同じ。

(59) 佐藤健太郎「古代日本の牛乳・乳製品の利用と貢進体制について」『関西大学東西学術研究所紀要』第45号，関西大学東西学術研究所，2012，pp.47～65.
（佐藤健太郎『日本古代の牧と馬政官司』塙書房，2016.に再録。）

(60) a. 註42文献に同じ。
b. 註59文献に同じ。

(61) 註59文献に同じ。

(62) a. 原明芳・金原正ほか『中央自動車道長野線埋蔵

文化財発掘調査報告書３―塩尻市内その２―吉田川西遺跡』日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター，1989.

b. 原明芳『奈良時代からつづく信濃の村・吉田川西遺跡』新泉社，2010.

c. 註59文献に同じ。

(63) 註59文献に同じ。

(64) 註59文献に同じ。

(65) 註5a文献に同じ。

(66) 本論では，季琳「牛郎織女の故事と七夕伝説」『城西国際大学大学院人文科学研究科紀要　文明の科学』第２号，城西国際大学，2003，pp.21（図１）に準じて，神話と民話を総称して「説話」と呼ぶ。説話には，伝説（伝承）や昔話なども含まれる。牽牛織女説話のあらすじは，天帝の娘である織女と牽牛（牛飼の青年）が結婚した後，互いに夢中になってしまい，仕事を放棄してしまったことから，天帝の怒りをかってしまい，天の川を境に引き裂かれてしまうが，天帝は，泣き暮らす二人の姿に同情して，一年に一度だけ七夕の夜にだけ逢うことを許したという，教訓を含めたものである。また，夜空に輝く天の川の西に位置する鷲座のアルタイル（Altair）を主星とする三星を牽牛（彦星），東に位置する琴座のベガ（Vega）を主星とする三星を織女（織姫）と呼び，天の川の中に位置する白鳥座の五星からなる北十字星の天鳶（鵲星）を加えて，牽牛織女説話が，広大な夜空に星座として描かれることでもよく知られている。

(67) a. 出名誠彦「牽牛織女説話の考察」『支那神話傳説の研究』中央公論社，1973，pp.111～138.

b. 大久保喜一郎「七夕説話伝承考」『明治大学教養論集』通巻75号，明治大学，1972，pp.1～22.

c. 家井眞「牽牛織女相會傳説起源攷」『二松学舎大学論集（昭和54年度）』二松学舎大学，1980，pp.55～78.

(68) a. 季琳「牛郎織女の故事と七夕伝説」『城西国際大学大学院人文科学研究科紀要　文明の科学』第２号，城西国際大学，2003，pp.21～43.

b. 杉本妙子「七夕伝説の比較文化―中国，日本，韓国朝鮮，ベトナムの比較―」『茨城大学人文学部紀要 コミュニケーション学科論集』第19号，茨城大学人文学部，2006，pp.101～118.

(69) a. 柳田國男「犬飼七夕譚」『定本 柳田國男集』第13巻，筑摩書房，1969，pp.95～106.

b. 茶園麻由「天人女房譚と七夕起源伝説」『日本文学論集』第23号，大東文化大学大学院，1999，pp.1～12.

c. 金谷信之「七夕伝承考」『関西外国語大学研究論集』第71号，関西外国語大学，2000，pp.247～260.

(70) 註68b文献p.107.

(71) 阪口有美子「牽牛織女の物語に関する一考察―徳興里古墳の牽牛織女図を中心に―」『郵政考古紀要』第42号，大阪郵政考古学会，2007，pp.36～53.

(72) 大阪府文化財センター・日本民家集落博物館編・発行『はたおりの歴史展―古代の織物生産を考える―』，2006.

(73) 木村友則ほか『甲塚古墳発掘調査報告書』下野市教育委員会，2014.

(74) 註5a文献に同じ。

(75) 犬飼七夕説話のあらすじは，犬飼が，天から降りて水浴びしている七夕の着物を隠してしまい，七夕はしかたなく犬飼と結婚するが，その後，七夕は天に帰ってしまい，天まで七夕を追いかけた犬飼は，天の川を境に七夕と離ればなれになってしまうという話であるが，説話の内容にバリエーションが多いことでも知られている。

(76) 註69a文献に同じ。

(77) 池内宏・梅原末治『通溝』巻下，日満文化協会，1940.

(78) a. 註32b文献に同じ。

b. 陳相偉・方起東「集安長川一号壁画墓」『吉林集安高句麗墓葬報告集（吉林省文物考古研究所編著）』科学出版社，2009，pp.65～85.

(79) 徳興里古墳の墓主（被葬者）・「鎮」の出自については，高句麗人説や亡命中国人説が発表されている。a・c文献は高句麗人説，b文献は亡命中国人説をとる。

a. 註34b文献に同じ。

b. 武田幸男「徳興里壁画古墳被葬者の出自と経歴」『朝鮮学報』第130輯，朝鮮学会，1989，pp.1～36.

c. 孫永鍾「徳興里壁画古墳被葬者亡命人説について」『高句麗・渤海と古代日本』雄山閣出版，1993，pp.49～73.

(80) 註71文献に同じ。